

2001 年度
海外学会派遣プログラム参加報告

楊 接期 「第 10 回教育における人工知能国際会議」-----

Laohaburanakit, Kanokwan Katagiri Noi 「日本語教科書を取り巻く現況と
2001 年度日本語教育学会春季大会」-----

Trede Melanie 「短期留学の感想」-----

全 振煥 「有難う！ストライキ - 第 9 回 DBMC 国際会議参加記より - 」-----

「第10回教育における人工知能国際会議」

10th International Conference on Artificial Intelligence in Education (AIED2001)

よう せつき
楊 接期

博士（教育工学）東京工業大学

国立中央大学資訊工程系助理教授（在台湾）

1999年度奨学生

2001年5月19日～5月23日にアメリカのSan Antonioで開催される「第10回教育における人工知能国際会議：10th International Conference on Artificial Intelligence in Education (AIED2001)」に参加しました。教育における人工知能国際会議は、2年に一度開催され、教育における人工知能の研究分野において最も権威のある国際会議であり、研究成果の発表、研究者間の相互啓発に大きく貢献しています。この学会は私にとって、特別な意義があります。なぜかという、私は初めて参加した国際会議は、1997年に日本の神戸で開催されたAIED97です。当時のことを思い出すと、国際会議に初めて参加する興奮的な気分と発表するときの緊張感を今でもはっきり覚えています。



今回の会議の主テーマは「Advanced Models of Learning for the Wired and Wireless Future」であり、近年顕著な進展を見せている、先進的な遠距離

通信技術、移動計算技術、分散的システム、ネットワーク技術などに関する論文の発表が行なわれました。研究発表のうち、多くの研究テーマは、現在私の関わっている研究プロジェクトの一つである「未来教室学習：Future Classroom Learning」に関連しています。この学会に参加することによって、関連する研究を行っている研究者と意見を交換しながら、相互交流ができました。コンピュータの急速的な進化とモバイル技術の進歩に伴い、モバイル技術を授業や学習に活用する研究が注目の焦点になっています。私たちは、未来の学習環境の変化に注目し、特に教室の学習環境作りに焦点を当て、任意教室、遠隔教育、電子ブック、電子カバン、モバイル機器の活用などの課題を試みています。

ところで、今回の会議の開催地は、アメリカのテキサスにあるSan Antonioという都市です。アメリカは私にとって初めてなので、San Antonioは初めていく都市ということも考えませんでした。航空券を注文するとき、乗り継ぎは2回が必要で聞いたら、ちょっと不便な場所かなあと思いました。また、学会は郊外の大学で開催されるので、さらにこのような印象を深めました。しかし、都心に行ってみたら、想像したことと違って、San Antonioは非常に特色のある都市ということが分かりました。特に、都心に運河が流れるエリアでは、観光客がたくさん集まっています。River Walkは、まさにSan Antonioの代表とも言えます。



また、歴史的な面から見ても、San Antonio はアメリカにとって、非常に重要な都市です。特に有名



なのが、1836年に発生した Alamo 戦役のことです。テキサス軍（ほとんど市民からなる）200人対メキシコ軍隊 5000人、13日の苦闘で全滅されたが、メキシコ軍に大きなダメージを与えました。最終的には、テキサス軍の後援で、メキシコ軍を敗れました。以来、Alamo はアメリカ人にとって自由の象徴になります。帰りの最後の半日に、Alamo 戦役の跡と戦役に関する記録映画を見て、アメリカを後にしました。



日本語教科書を取り巻く現況と 2001 年度日本語教育学会春季大会

ラオハブラナキット カノックワン カタギリ ノイ
Laohaburanakit, Kanokwan Katagiri Noi

博士（言語学）筑波大学
タイ国チュラロンコン大学文学部（講師）助教授
1997 年度奨学生

2001 年 5 月 20 日～27 日の期間で、資料収集と日本語教育学会参加のために、海外学会派遣プログラムを利用して日本へ行って来た。現在、日本語初級後半教科書を作成中で、その参考となる文献を探

すため、滞在期間の多くを資料収集に使った。主な訪問先は、筑波大学中央図書館、筑波大学日本語日本文化学類資料室、日本語教科書の専門店である凡人社、新宿や神田の書店などである。

収集した資料には二種類ある。一つは、学術的な研究論文で、もう一つは日本で出版されている日本語教科書及び教材である。学術的な研究論文は、学習者がよく間違える事柄(文法ばかりでなく、社会的場面での用法など)を取り上げて分析し、その解決方法を紹介するような論文(「誤用分析」と呼ぶ)を中心に収集した。個別的な事例研究であるが、意外と数は少なく、特にタイ人学習者の問題点を取り上げる論文はほとんどないといういい状態である。最近の傾向としては、英語話者の誤用よりも、中国語、韓国語話者の誤用研究が増えてきている。日本への留学生が英語話者よりも圧倒的に多いのに、これまで余り研究されて来なかったからである。誤用研究もここ数年でようやくアジアに関心が向いてきたといういいだろう。タイ語は中国語に近い性質を持つところがあるので、中国語話者の誤用研究は参考となる。

日本語教科書に関しては、日本で出版されている教科書の種類が2年前と比べてかなり多くなり、日本語学習の環境はずっとよくなったように感じた。最近の教科書の傾向は、コミュニケーション重視になっていて、学習者が必ず経験する様々な状況を想定した会話文やタスクがたくさん盛り込まれている。しかも設定状況やイラストレーションなどが工夫され、できるだけ楽しく学べるように作られている。誤用研究や日本語教師たちの教室内外での経験をもとにした日本語教育分野での研究成果がようやく教科書という形になって見られるようになってきたのだろう。参考となるシラバスやタスクが多かった。特に練習問題では、今まで気がつかなかった練習方法も見られ勉強になった。今回は最低限必要な教科書だけを買って、あとはできるだけその場で読むことにしたため、本屋にいる時間が多かった。

日本語教育学会の大会は26日と27日に東京女子大学で行われた。毎年春と秋の2回行われるうちの春季大会である。大会に参加する人は以前より増えて、26日のシンポジウムでは千人はいる講堂がいっぱいになり補助席が出るほどだった。さて、そのシンポジウムは「『待遇表現教育』の方法論と実践」というテーマで行われた。「待遇表現」とは、狭い意味

での敬語表現そのものから、広い意味でのポライトネス(politeness)という言語行動までを含めてさす言葉である。これまでの日本語教育では敬語表現だけを教える場合が多かった。敬語表現そのものは体系的であり、全部覚えることは難しいが全体を把握することは容易である。しかし、表現全部を覚えていても、日本社会において、日本人に対してそれを適切に使いこなすことができるとは限らない。丁寧さが足りなかったり、場合によっては丁寧すぎたり、丁寧だが状況に合わなかったりするのである。この意味において日本語学習者にとって待遇表現は難しい課題の一つである。こうした待遇表現を学習者に教えていくための研究、教育の方法論、具体的な指導法などが今回発表された。待遇表現研究の一つとして「『つまらないものですが...』を日本人は本当に使っているか」という研究も紹介され興味深かった。方法論的には明確な場面の設定が重要であることが指摘され、具体的な指導法として対象者別の授業や、ビジネス場面を取り上げた授業の実践報告、TPR(Total Physical Response)による指導法などが紹介された。

27日は口頭発表、ポスター発表、パネルセッション、デモンストレーションが行われた。口頭発表は、4つの会場に分けられていて、それぞれ文法、作文・会話指導、発音指導、日本語教育史・調査報告と大まかに分類できる。全体的に特定の学習者を被験者とした実験的研究(文法、音声)や特定言語話者の誤用分析が多かった。英語、中国語、韓国語以外には、インドネシア語が取り上げられて対照分析されているのが目立った。また、興味を引いたものには、日本人の間でも使用法にゆれのあると言われている(最近の若者がよく使う)「じゃないですか」を学習者がどのように使っているかという研究や、談話レベル(一つの文より大きい単位のもの)における研究で、日本人と韓国人学習者の談話展開の方法の違いを指摘する「議論の場で使われる『くり返し』について」というものがあった。そして、今回日本語教育史分野において、明治期に日本に留学したシャム国(現在のタイ)女子留学生4人について書かれた貴重な資料が発見され、その内容が発表された。当

時 16-17 歳であった彼女たちが日本で入浴したり、うなぎを食べたり、職業学校に行き刺繍や造花を習ったりといった生活をしてきたこと、主に待遇表現を中心とした会話の日本語を学んでいたことなどが資料に基づき紹介された。

今回の口頭発表では、コンピュータを持ち込んでプレゼンテーションソフトを使った発表をする人が多かった。学会での発表方法も年々変わっていくの

だと気付いて驚いた。大会会場では、大学や大学院の時の恩師、旧友にも会え、近況報告や情報交換をすることができた。また、恩師と話しているときに、知らない先生から話し掛けられてタイの様子を聞かれたり、恩師の紹介で新しく知り合いとなった方もできた。学会参加の意義はこのようなところにもあると感じた。

短期留学の感想

トレデ メラニー
Trede Melanie

博士（美術史）ハイデルベルク大学大学院
ニューヨーク大学美術史研究所助教授（在ニュ・ヨ・ク）
1996 年度奨学生

渥美財団のお陰で今年の5月から7月まで関西地方や東京で調査をする目的で、日本へまいりました。調査の内容は日本美術史のなかで、絵巻を注文したペイトロンの（宗教的・政治的などの）制作意図や動機を具体的な例を中心に調べるものでした。このような研究テーマでは美術・博物館や神社などの調査や、図書館や東京文化財研究所のような研究設備で調べることは必要となります。そこで見つけた情報を8月にドイツのベルリンで開催されたアジア研究学会（International Convention of Asian Studies）で発表しました。

一年ぶりでしたのに、少しずつ学問の世界や社会全般に変更があった気がしました。私の留学生時代の友達あるいは美術館や大学の先生たちから具体的な例を伺いました。今は前より就職できることは大変難しくなっていて、それは特に女性の場合にそうでした。日本での不景気はやはり文化と関連している設備では特に大変らしいです。それは例えば国立博物館でもそうですが、今年は国立の設備から

独立行政法人に変えられてしまいました。その結果、学芸員たちは、会議が増えたり、仕事が全然変わったりして、そして大勢のお客さん呼びかけのような展覧会しか組織できなくなってきたということです。将来の不安もあったかもしれませんが、美術館をやめて、大学に就職した学芸員も何人かいました。

個人的なレベルでは、変化を感じませんでしたし、逆に最近北アメリカに引っ越してからの経験と違う経験をできました。例えば、日本での私の友達はもちろんのこと、仕事関係の友達や友人も長い時間をかけて、私と話したり、食べたりしていたのを驚きました。留学生時代の指導教員でありました、学習院大学の千野香織先生と何回もお会いできまして、先生のお陰で奈良や東京国立博物館でも絵巻の調査ができました。そのときに、共同研究はいかに効果的で、利益のある制度であるかを久しぶりに確認できました。欧米で一緒に研究することは稀ではないかと痛感しました。

また、図書館や美術館で、今度掲載するために写真の掲載許可を何箇所にも申請しなくてはいけなかったのです。そこでの職員はとても親切で、合理的で信頼できるように働いてくれたのがとても印象的

でした。

最後に、世界一の食事を食べられましたが、それは長い話しになりますので、今度の機会に任せます。

有難う！ストライキ - 第9回 DBMC 国際会議参加記より -

ジョン ジンファン
全 振煥

博士（環境理工学創造）東京工業大学
鹿島建設(株)技術研究所研究員
2001 年度奨学生

日本の成田空港を離陸した飛行機が太平洋を8時間渡って着いたオーストラリアのブリスベン空港。夏が終わって秋が始まる時期だと聞いたが、まだ夏の暑さは残っていた。日本以外の国への経験はないが、空港の風景は見慣れた感じがした。

DBMC (Durability of Building Materials and Components) は 1978 年に始まり「未来のためにもっと良い建物を作りましょう」という目的で3年ごとに開催されている国際会議である。地球環境の保護と親和という観点から建設材料の維持と評価管理・耐久性・使用寿命の予測と評価・使用性評価などを中心として研究発表が行なわれている。私が本国際会議に初めて発表したのは、前回の 1999 年カナダで開かれた 8 DBMC であった。そのとき、繰り返し疲労を受けたコンクリートとモルタルの細孔構造と中性化の変化について、疲労を受けた建物の耐久性について発表する予定だったが、参加できなくなったため論文だけ提出した。

今回は3月15日～21日までオーストラリアのブリスベンで第9回のDBMC会議と研究発表会が開催された。CSIRO (Commonwealth Scientific and Industrial Research Organisation)の会長からの開幕挨拶を始め、世界から来た専門家と研究者の発表が四つのセクションに分けて行われた。他の国

の事情を聞いて自分の国の研究と比較しながら積極



国際会議が開かれたブリスベンコンベンションセンター



遊覧船上でのゴールドコーストの景色

的な質問が論じられた。私は駐車場とビルの床などの防水層が車両走行の外力により生じた損傷に対する抵抗性の評価方法を確立するため、損傷の調査の結果と、それをもとにして多数回の車両の走行による損傷を再現するため開発された試験機を用いた実験結果を発表した。

最終日の夜、国際会議の最後の懇親会がブリスベンの市庁ホールで行われた。この会議期間中に撮った発表者と参加者の様子をビデオで見ながらお別れをした。

旅程の最後の日、日本へ向けて出発するため朝早くホテルから空港まで行った。幸か不幸か空港に着いた際、空港従業員のストライキのため、飛行機の

時間が夜10時20分発に延ばされた。会議に参加した期間中、あまり自由時間がなかった私は内心、喜んで叫んだ。せっかく来たので少しは観光することも勉強になると思ったからである。余った10時間、世界で一番有名で美しい海辺であるゴールドコーストへ向かって遊覧船に乗って巡った。とても美しくてきれいな海辺だった。本当にストライキがあつて良かったと思った。

短い時間の旅であったが、いろいろな国の人とお話して、やはり世界は狭くて広いということを強く感じた。なお、どの国でも環境の問題については、大きな関心を持っていることと、これから私が研究すべき課題を見つけることができた。